

聖書：コリント人への手紙第一 11：11～16

説教題：自分自身で判断しなさい

日時：2022年10月2日（朝拝）

コリント教会で問題になっていたかぶり物についてパウロは語っています。かぶり物とは何でしょうか。これは頭を覆うショールあるいはヴェールのようなものだったと思われます。今、読んでいる箇所から分かりますように、コリントでは礼拝で男はかぶり物を着けず、女は着けることが通例だったようです。そんな中、ある女性たちはかぶり物を着けずに祈りや預言をしていました。これが問題になっていたようです。ある人たちがこのような行動をしたのはキリスト者の自由を誤って捉えていたことと関係していたのであろうということの前回見ました。10章23節にコリント教会で主張されていたスローガンが括弧に括られて2回出て来ました。それは「すべてのことが許されている」というものでした。クリスチャンはキリストにあって今やすべてのことから自由である。ガラテヤ人への手紙3章28節：「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」このような福音に接し、ある人たちは「今や男と女もない。だから女は従来のようにかぶり物を着けなければならないということはない。男と同じようにかぶり物を着けなくても良い」と主張し、これを実行したのでしょうか。その結果、パウロが10章23節で『すべてのことが許されている』と言いますが、すべてのことが益になるわけではありません。『すべてのことが許されている』と言いますが、すべてのことが人を育てるとはかぎりません。」と言っていた通り、彼女たちの行為は周りに益をもたらさず、人を育てること、すなわち人々の霊的成長と教会の建て上げにつながることでしなかつた。むしろ混乱、論争、分裂を引き起こし、教会を破壊しかねない動きとなっていたのです。

そんなコリント教会に対し、パウロは3節で、この世界には神が定めている秩序があることについて述べました。3節：「しかし、あなたがたに次のことを知ってほしいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。」順番に並べると、神－キリスト－男－女という秩序です。そして男と女の関係がこのようなものである根拠としてパウロは8～9節で創造の秩序に訴えました。8～9節：「男が女から出たのではなく、女が男から出たからです。また、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたからです。」神は男と

女を造る際、まず男を造り、その男から一部を取って女を造りました。ここに男女に対する神の御心の違いがあります。それは男がかしらであり、代表する立場にあるということです。これは墮落前の創造における御心ですから、この世が続く限り変わりません。

さてこれに続いてパウロは 11～12 節の言葉を述べます。これは前に述べたことが誤解されないためであると考えられます。まず 11 節：「とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。」 ここには男女の相互依存性、お互いがお互いを必要としていることが述べられています。男女は互いに助け合い、協力し合って生きるべき者たちです。ですから平等です。そして 12 節では「女が男から出たのと同様に、男も女によって生まれるのだからです。」と言います。8 節で神の創造のみわざに遡り、「女は男から出た」と言われましたが、その後の出産においては男も女によって生まれます。そういう意味で男の存在は女に負っています。ですからどちらかが存在としてより勝っているなどと主張することはできません。両者は同等です。ただ役割において神は男にかしらの役割、リーダーシップの務めを定めておられるのです。そしてパウロは 12 節最後で「しかし、すべては神から出ています。」と言います。男と女が互いを見比べて、どちらが勝っているかと論じて合っている解決がありません。パウロは両者の上に神がいることに思いを向けさせます。この方こそ一切の源です。この方に私たちはすべてを負っています。ですから私たちはその方の前で自らをわきまえるべきです。神は私たちにどういう御心を持っておられるのか。男にはどんな役割を、女にはどんな役割を与えておられるのか。その御心の前にへりくだって、その方の目的に生きるようにすることが大切であるということです。そしてそのように生きるところに、そのように造られている私たちの真の幸いがあるはずなのです。

さて 13 節以降はかぶり物についてのまとめの部分です。パウロはそこで「あなたがたは自分自身で判断しなさい。」と言います。使徒に命令されたからと言って文句を言いながら渋々従うのではなく、自らが良く考えて判断しなさいと。知恵があるコリント人なら、それはできるはずです。そしてパウロがこう言っているのは、今取り扱っている問題が福音の根幹に関わるものではないということも暗示しています。もし福音が立つか倒れるかに関わる内容ならパウロはこうは言わなかったはずで、使徒の教えとして明確に語ったはずでしょう。しかしこのように、あなたがたが自分自身

で判断しなさいと言ったのは、そういう種類の事柄だからです。これは彼らが決めるべきことです。自分たちが置かれた状況の中で彼らが良く考えて決断すべきことです。パウロがすでに示した大切な原則をもとにして。なお、この「判断しなさい」という言葉は不定過去と呼ばれる時制で記されていて、そのニュアンスは「きっぱり決定せよ」というものです。ああでもない、こうでもないと言いつけるのはやめて、良く考えて、自分たちとしての決定を下しなさいということです。

そして言います。「女が何もかぶらないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか」と。パウロが求めている判断は、ふさわしいのか、そうでないのかということです。ある女の人たちはかぶり物を着けないで礼拝していましたが、それはふさわしいことなのか。これはその状態にぴったり合っているのかという意味です。適切なのかということです。その判断を下すにあたって、次の二つのことも考慮に入れるべきことをパウロは語ります。一つは14～15節で述べられている「自然」です。これは人々にとって自然なこと、社会が自然だと思ふことを指します。パウロは14節で「男が長い髪をしていたら・・・恥ずかしい」と言います。これは当時の男にとってそうでした。また当時と言わず、歴史の多くにおいてそうであったと言えます。一般的に言って男の人の髪の毛は短いですね。もちろん例外はありますが、総じて言えば短い。この自然そのものが何かを教えていないかとパウロは言います。反対に女の人には長い髪をしています。男に比べてそうです。もちろん個人個人色々で常に例外はあります。しかし一般的に言って、世界を見渡せば長い髪をしているのは女の人です。それは女の人の栄光に属することであるとパウロは言います。このように男と女の頭の状態は違います。一般的に見て言えば女の人がかぶり物をかぶっていると言えます。このことも女がかぶり物をかぶるのは適切であること、それがふさわしいことを暗示しているのではないかとパウロは言っているわけです。果たしてこのようなことが、この問題を決めるにあたっての根拠になることなのかとある人は思うかもしれません。

参考になるのはウェストミンスター信仰告白第1章6節です。そこに神の栄光また人間の救いと信仰と生活のために必要なすべてのことは、聖書の中に明白に示されているか、正当で必然的な結論として聖書から引き出されるとあります。簡単に言えば聖書こそ私たちのあらゆる信仰生活のための唯一の基準であり、またそのために十分なものであるということです。しかし後半に、それにもかかわらず「神礼拝と教会統

治に関しては、常に守られなければならないみ言葉の通則に従い、自然の光とキリスト教的分別とによって規制されなければならない、人間行動と社会に共通のいくつかの事情があること、を認める」と言われています。そしてこの部分の証拠聖句として信仰告白の作者たちはI コリント 11 章 13 節、14 節をあげました。まさに今私たちが見ている箇所です。これはどういう意味でしょう。もちろん礼拝を行う際、その本質的なことは聖書から学び取らなければなりません。たとえば礼拝で何をするのかについては聖書にはっきり示されていることに従うべきです。そうでないと礼拝は人間の娯楽、エンターテイメントになりかねません。しかし礼拝に関わるすべてのことが全部聖書に書いてあるわけではありません。たとえばどんな建物で礼拝するかとか、何時から礼拝を始めるかとか、どんな服装で礼拝すべきか、・・・等々。そしてまさに今、読んでいる箇所で論じられているのは、どんな髪形にすべきかです。礼拝出席者の頭の状態です。こんなことまで聖書はいちいち細かく規定していません。そういうことについては「自然の光とキリスト教的分別」とによって考えられるべきであるとウェストミンスター信仰告白は、今日の箇所を証拠聖句の一つとして語っています。「自然の光」とは簡単に言えば理性とか常識です。ですから常識的に決めるということです。もちろん信仰告白が述べるように「常に守られなければならないみ言葉の通則に従う」という枠の中です。「キリスト教的分別」とはキリスト者としての知恵をもってということ。パウロはそのようにここで常識的に決めるようにと言っているわけです。人々の一般的感覚に訴えているのです。

当時において、少なくともコリントやその周辺の世界では男はかぶり物を着けず、女はかぶり物を着けて礼拝など公的な場所に出るのが一般的でした。そしてそれは 3 節で見た「神ーキリストー男ー女」という秩序を、当時の文化の中で表すのにごく自然なことであり、ふさわしいことでした。そんな中、ある女たちはキリスト者の自由とか聖霊に導かれた新しい霊的人間と主張して、そのかぶり物を取って礼拝しました。それは当時の文化においては、神が定めている秩序の無視、あるいはその逆転、その否定を象徴するものでした。それをそのままにするのが良いのかどうかということです。ここで女性も祈りや預言ができると言われていました。その働きはできます。その際、今までかぶっていたかぶり物をどうしても取らなければならないのか。当時のコリントの状況で、それがふさわしいことなのか。パウロはそのことについて良く考えて自分で判断しなさいと言っています。果たしてそれは益をもたらすのか、人々の成長と祝福に仕えることなのか。単なる自己主張に過ぎず、むしろ人々の心を神礼拝か

ら引き離して自分に向けさせるものとなるだけではないのか。そのことを常識にも照らして判断せよ！と言っているわけです。

もう一つのことが最後の 16 節にあります。そこに「たとえ、だれかがこのことに異議を唱えたくても」とあります。これはコリント教会の中には実際にその傾向があったということなのでしょう。知識や知恵を誇るコリント人たちは議論好きでした。彼らは異議を唱え始めたらやめない人たちでした。それならこうでしょう、これならそうでしょう、・・・といつまでも続ける。きりがない。そういう人たちに対し、パウロはそのような習慣、すなわち女がかぶり物を着けずに祈りや預言をする習慣は私たち使徒たちの間にはないし、神の諸教会にもないと言います。ここに常識に加えて他の諸教会の姿も何かを判断するに当たっては考慮に入れるべきことが示されています。私たちは自分を主張することに熱心で、ともすると独善的になりやすいものです。そんな私たちは同じ信仰によって歩んでいる他の諸教会、いや神が養い育てている神の諸教会の姿も参考にすべきであるということです。もちろん他の教会の姿が絶対基準となるわけではありません。御言葉こそ私たちの唯一の基準であり、その御言葉によって他の諸教会が変えられて行くべきということもあり得ます。しかしパウロはこうして、まず他の教会の姿も十分に考慮に入れて再考せよと言っています。自分だけが正しいと思って一人誤った道を行くことがないように。他の神の諸教会の姿に照らして自らを再検討してみるように！と。

前回の最後に触れましたように、この箇所は今日も女性は礼拝でかぶり物を着けるようにと命じている箇所ではありません。聖書は基本原則を示しています。その基本原則を自分たちが置かれた文化の中でどう適用し、どう実践するかはよく考えて判断しなさいと勧められています。最後にまとめとして短く 3 つのことを述べて終わります。一つ目は、私たちがどのようにするのであれ、3 節に示された基本原則は踏まえられていなければならないということです。もしこれを投げ捨てる形で何かが行われるなら、それは正しくないと言わなければなりません。3 節で言われたことは創造の秩序に関することであり、この世界においてこの御心は変わりません。ですから私たちの実践がどんな表現を取るにしても、この神の御心と調和し、この神の御心を良い形で映し出すものであるようにと考える必要があります。

二つ目に、その決定に当たっては、今日見たように、常識や他の教会の姿も考慮に

入れるべきであるということです。私たちにとって聖書こそ唯一の基準です。しかし私たちが知りたい全部のことが書いてあるわけではありません。そこに私たちが判断すべき領域や事柄はあります。その際、御言葉の一般的原則を土台としつつも、独善的にならないように、一般感覚（常識）、また他教会のあり方も、決定を下すにあたって重要な材料になると聖書は示しています。

そして三つ目に、これは御言葉の一般原則に当たると言えますが、パウロがこの箇所前後で強調しているように、それは他者に益をもたらすのか、他者の成長に仕えるものであるのかをチェックすべきであるということです。コリント人たちは知識を誇り、また自分の権利や自由を主張することにばかり思いが行っていました。しかしパウロは前に「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」と言いました。私たちの態度や言動は他の兄弟姉妹の成長を助けるものともなり得ますし、逆につまずきをもたらすものともなり得ます。それは礼拝におけるかぶり物といった小さな一つのことを取っても実にそうなのです。そういうことからさらに言えば、兄弟姉妹の間での身だしなみ、自分の服装といったことも、実に兄弟姉妹を助けるものともなり得ますし、反対に大切な神への礼拝を妨げるものともなり得ます。「私は私のしたいようにする。どうして私がしたいようにしてはいけないのか」と主張することにばかり思いがっているなら、ここでのコリント人たちと同じです。そうではなく、この状況においてどうすることがふさわしいのかと考えることこそパウロが求めている大切なことです。そのことを御言葉に立ちつつ、自分自身で判断せよと彼は言っています。その判断と歩みとをもって、他者の益と成長に仕える者、そして神にすべての栄光を帰すクリスチャンの歩みへと導かれたいと思います。